



北島トラディショナル・ナイト vol. 24 ケルト・北欧音楽への旅 5 分 間 の 魔 法

日時：令和2年10月17日(土)
午後7時開演(午後9時終演予定)

会場：3階 多目的ホール

出演：hatao&nami(ハタオ&ナミ)

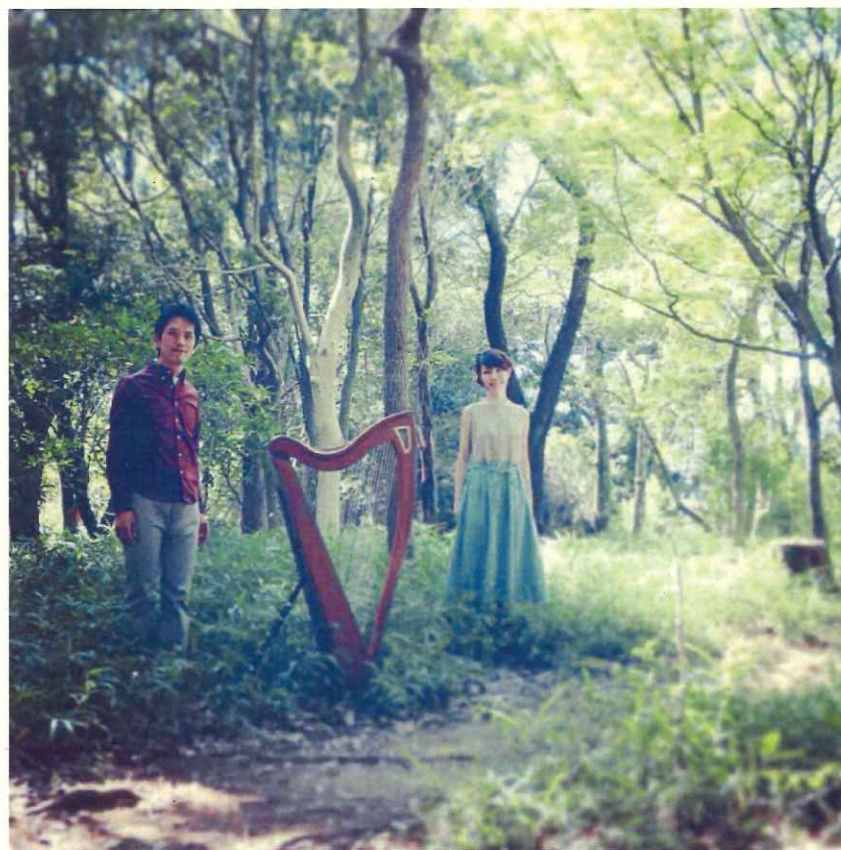
畑山智明 アイリッシュフルート、パイプ、
ティンホイッスル ほか

上原奈未 ハープ、ピアノ、ほか

前売り券の購入について、ただいま図書館カウンターでの販売は停止しております。カウンター及び電話での予約受付のみの取り扱い(前売り券の代金は開催日当日に、受付にてお支払いいただきます)となります。ご了承ください。

入場料：大学生・一般 前売2,000円(当日2,500円)
小・中・高 前売1,500円(当日2,000円)

■ケルト、北欧音楽の分野で長く活動してきた、ケルト・北欧の笛奏者hataoとハープ、ピアノ奏者のnamiが2011年に結成した本格派デュオ。■ティンホイッスルやアイリッシュフルートなどケルト音楽に欠かせない定番楽器、北欧の地方に伝わる珍しい笛やスコットランドの伝統楽器・バグパイプなどユニークな楽器を駆使して、彩り豊かに奏でます■あふれる異国情緒、けれどどこか懐かしい…アイルランド～ケルト文化園の伝承曲の魅力をたっぷり堪能できるひとときをお楽しみください！



hatao&nami
左から 畑山智明、上原奈未 (敬称略)

主催：北島トラディショナル・ナイト実行委員会
(☎088-698-1100)

人形劇団べんべろべえ公演

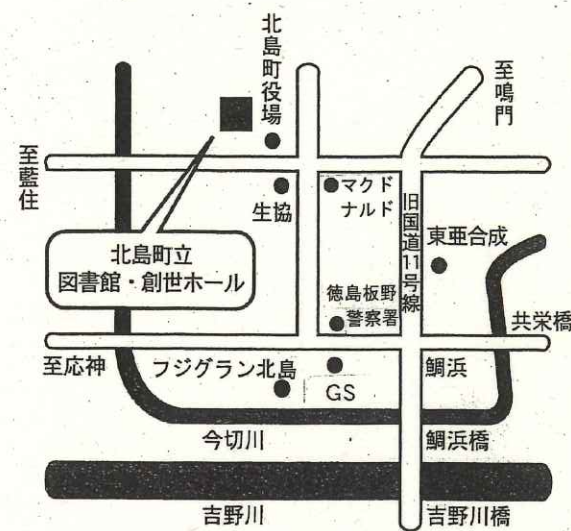
日時：令和2年10月22日(木) 午前11時
会場：2階 ハイビジョンシアター 入場無料
対象：就学前の子ども 赤ちゃんも大歓迎
演目：「くいしんぼうのミーちゃん」他
問合せ：人形劇団べんべろべえ
(代表：兵頭 ☎088-698-6652)

※創世ホールに来場される方へ※

▼入場される方には、マスクの着用と手指のアルコール消毒をお願いいたします。

▼観客同士の距離を一定の間に保つため、3階多目的ホールの座席数を減らしております。(前後左右を1席空けてお座りいただくようにしております)

■なお、今後の感染症拡大状況に応じて、対応を変更することがあります。ご迷惑をおかけしまして恐れ入りますが、ご協力くださいますようお願い申し上げます。



文化ジャーナル 300号達成記念★第27号復刻掲載

文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

2・23◆ダンスリー・コンサート、 3・16●松田哲夫氏講演会を終えて

■今年も2月3日は当館企画の大きな催しが続ぎ、疾風怒濤の日々だった。こぼれ話をここに書きとめておきたい。

■私は常々、他の施設の担当者ももっと積極的に自分が日頃感じていることや企画に関する苦労話などを、どしどし広報で発表したらよいと考えている。それによって、利用者に肉声が届き、より一層施設の企画に親しんでいただけたらと思うのである。また、ファンが喜ぶような情報を提供することの意義も大いにあると考える。

■今年も2月23日の夜、ダンスリー・ルネサンス合奏団コンサート「トリスタンの悲しみ」を開催し、その3週間後3月16日「松田哲夫氏講演会 本づくりに賭けた情熱」を開催した(昨年も全く同じパターンで、2月24日に平井満美子・佐野健二コンサートを、3月17日に紀田順一郎講演会を開催)。2つの催しの広報宣伝や、打ち合わせ等を殆ど同時並行して行なわなければならない、最後は体がいくつあっても足りない状況になる。今回も、私はへろへろになった。

……ダンスリー・ルネサンス合奏団コンサートこぼれ話……

■ダンスリー・ルネサンス合奏団「トリスタンの悲しみ」の企画を進める上で、もっとも頭を痛めたのは当日パンフレットの編集制作のことだった。「トリスタンの悲しみ」はナレーションを交えた物語形式になっているコンサートなのだが、そのナレーションと訳詩をそれぞれ全文掲載して欲しいということだったので、今回異例の8ページの冊子形式になった。当館主催のコンサートや講演会は、チラシ、ポスター、当日パンフレット等全て私が職場のワープロで文字を打ち出し、版下を作って印刷所に入稿しているのだが、さすがに、400字詰め原稿用紙換算40枚前後の文字を入力し、8ページにおさめるのは大変だった。パンフレットは私がない知恵を絞って取り組んだ力作なので、どうか大切に保管して欲しいと思う。

■「ダンスリー・ルネサンス合奏団」はレコードなどでは、「ダンスリー」となっている。そのことについてリーダーの岡本さんに聞いてみたら、①グループ名は結成当初から「ダンスリー・ルネサンス合奏団」で名称変更したことはない、②レコード会社の助言等があり、レコードでの表記を「ダンスリー」にしている、ということだった。

■プログレッシブ・ロック専門誌「マーキー・ムーン」8号(82年4月発行)に、岡本一郎さんのインタビューが掲載されている。私は当時それを読んで、ダンスリーへの関心を深めたので当該誌を持参し岡本さんに尋ねてみた。そのインタビューは、電話による取材とのことだった。岡本さんから「よくお持ちでしたね」といわれた。

■ダンスリー・ルネサンス合奏団のファースト・アルバム「絆」は幻のアルバムと呼ばれている。プレス完了とときを同じくして発売元のURCレコードが倒産したため、市場に流通しなかったのである。メンバーはもとより、リーダーの岡本さんでさえそのレコードは持っていない。その辺のいきさつについては、次のとおり。

一、ダンスリーは、かつて5つの赤い風船と共演したことがあり、そのメンバーが関心を示し、URCを紹介され、契約をした。

一、URCが倒産して、ずっとその社長の行方を捜したが分からない。また、マスターテープもそのときになくなってしまい、手の打ちようがない。もし誰か知っている人がいたら教えて欲しい。

■ミサワからのCDは、同社が音楽事業から撤退したため、残念ながらこの数年間廃盤となっており、ファンを悔しがらせていた。しかし最近、ミサワ側と一応話がつき、ダンスリーの自主制作という形で流通させてもよいということになったので、年内に再プレスできる見込みがついたとのことだった。ファンには朗報だろう。

……松田哲夫氏講演会こぼれ話……

■松田哲夫さんの講演会で、5つの団体から名義協賛をいただいた。これは、昨年12月20日ごろ突然思いついた。チラシとポスターは1月中旬までに印刷発注しないといけないので、年末年始をはさむきわどい時期だった。講演で取り上げていただく宮武外骨の出身地・香川県綾南町は、外骨さんで町おこしをしており、松田さんたちを招いたシンポジウムには、私も見に行き町長さんから貴重なウチワを頂戴したこともあるのですぐひらめいた。松田さんに相談すると、綾南町は町長さんが積極的だから大丈夫だろう、塩釜市も長井勝一記念館に取り組んでいるので担当者を通じれば協賛してくれるのではとのこと、私は『ガロ』編集部にお問い合わせ記念館の担当課と連絡先を教えてもらった。ジャストシステムも、筑摩と共同でCD-ROMを開発したりして交流があること(紀田順一郎さんの紹介がきっかけとなっている)、昨年紀田さんの講演会で当館も大変お世話になったこと等を考慮し、打診してみることにした。

■正式文書で申請した結果、5つの団体とも快くOKのご返事をいただいた。塩釜市からの封筒には、協賛承諾書と「長井勝一と『ガロ』展や開設準備中の長井勝一記念館の資料が入っていた。お礼の電話をかけるとその担当の方は、塩釜市立図書館にいたことがあり、93年6月に長井氏、永島慎二氏、南伸坊氏、杉浦日向子氏によるシンポジウムを企画した人だということも分かったのだった。どこの自治体にも似たようなことを考えている人がいるのだと思うと勇気が湧いた。塩釜市立図書館では『ガロ』をずっと購入しているという。たぶん全国の市町村立図書館で、『ガロ』を定期で買っているところは塩釜だけだろう。私はますます感激してしまっただけだ。いつか塩釜市

を表敬訪問しなくてはならないと思った。

■四国放送ラジオのアナウンサー・坂上昭子さんから日曜朝の「JRTサンデーウェーブ」の中のインタビュー・コーナー「昭子のワンダフルピープル」で、松田さんに取材をしたいという打診があった。坂上さんは大変謙虚な方で、当日は講演に力を注いでいただかないといけないのでインタビューは講演の後で行ないたい、そして事前に著書も読んでおくつもりであること、当日はもちろん講演会場に足を運び、講演をきいたうえでインタビューにのぞみたいとのことだった。松田さんはこの申し出を快く承諾、講演の後当館1階でインタビューが収録され、3月23日に放送された。

■『あわわ』編集部の女性からも取材申し入れがあった。こちらは講演会当日の朝、松田さんが宿泊したホテル1階で取材ということになった。記事は4月25日発売の5月号に掲載される。

■講演会には、東京からジャストシステム出版部・中尾勝部長、高松から「ぐわいこつふあんくらぶ」の佐古口会長はじめ総勢4名、綾南町教育委員会から1名、高知の人も1名参加されていた。

■松田さんは、印刷史研究会のことも、朗文堂の片塩二郎さんのこともご存じだった。近く片塩さんに話を聞きに行く予定もあるとのことだった。印刷史研究会同人の日下潤一氏と親しいらしい。

■3月25日に松田さんから手紙が届いた。その一部を紹介しよう。「先日は、いろいろお世話になりました。私のつたない話で、ご満足いただけたでしょうか? 長井さんのことを、ああいう風に人前でしゃべるのは初めてなので、ほくにはとても新鮮でした。なんだか、しみじみとした気分になってしまいました。(略)ドイツ館の印刷物は、印刷フェチのほくには、垂涎ものでした。あそこに展示するだけで埋もれさせてはもったいないですね。ほくのほうは、なにかと忙しくなってきました。①テレビの出演が、これまでは月2回だったのが、毎週になってきました。②大日本印刷との雑誌が、6月創刊をめざして、いよいよ動き出しました。ほくは「印刷に恋して」という連載を書かなければなりません。③久々の路上観察のプロジェクトが動きはじめました。「東海道五十三次」です。(略)いつか、上京の予定があるとのこと、是非遊びにきてください。ほんとうにありがとうございました。草々」

■2つの催しが終わってホッとしたためか、私は3月26日午後3時ごろ、職場で激しい嘔吐症状にみまわれた。風邪による嘔吐と発熱で私はダウンした。その夜の演劇公演「ベッカニコおに」で、観客が感動に心を震わせているころ、私は嘔吐を繰り返し、発熱による悪寒のため自宅の布団の中でガタガタ震えていたのである。

後記◎板東孝明氏のインタビューは今号休載です。ご了承ください。次号をお楽しみに。◆3月末に家族旅行で岐阜県養老町にある前衛的な公園「養老天命反転地」に行った。荒川修作の凄まじい造形力に圧倒された。すばらしいところだった。(小西昌幸)

■六月号から過去の「文化ジャーナル」を復刻掲載しています。今回は第27号「一九九七年四月号です。同年二月開催のダンスリー・ルネサンス合奏団演奏会(「トリスタンの悲しみ」と、三月の松田哲夫さん講演会(本づくりに賭けた情熱)のレポートを掲載しています。松田さんからの書簡も掲載しており、そこには「ドイツ館の印刷物は垂涎ものでした。埋もれさせてはもったいない」という趣旨のことをお書きになっています。(小西昌幸)★

1997年4月号